慢性咳嗽から咽喉頭異常感症に移行した興味ある胃食道逆流症(GERD)の一例

松原英俊　　医仁会　武田総合病院　総合診療科

GERDは種々の食道外症状を来す疾患として注目されている。これまで(1)食道外症状患者は7%～19%しか胸焼け症状を感じない、(2)咽喉頭異常感症患者は咳嗽患者に比べ飲食に関する危険因子が少なく逆に寒さストレスを感じるなど自律神経の異常を疑う所見がある、の2点を報告してきた。今回慢性咳嗽から咽喉頭異常感、その後自律神経症状も出現しGERD治療を行い速やかに改善した症例を経験したので報告する。

症例：41才女性。【主訴】咽喉頭異常感　【職歴】看護師　【現病歴】X-2年夏より食欲増進、大食で寝る直前まで食べていた。X-1年2月ひどい咳嗽があり耳鼻科で異常なく咳喘息として加療したが全く改善なし。咳嗽は抗アレルギー剤で改善したが消失せず続き、のどの不快感が始まった。喉頭鏡では異常なく放置。この後就寝時に微熱などを感じるとともに、のどの締め付け感が更に辛くなった。X年7月起床後動悸があり出勤中に悪化。恐怖感は感じたものの冷静に自ら救急車を呼び、洞性頻脈のみだった。数日間休み勤務に復帰するも仕事中に動悸あり、近医で漢方薬を処方されたが無効。8/20より病欠。熟睡感消失。夜勤の前日は食べてすぐ寝、起きた時心窩部がしんどくなった。X-1年夏施行した上部消化管内視鏡検査では胃ポリープのみ。疲労感も強く慢性疲労症候群の解釈モデルで精査加療希望にてX年8/24滋賀医科大学総合診療科慢性疲労外来を受診した。

【所見】表情は明るい。口腔内・頸部・心音：異常なし。腹部：心窩部・傍臍部に軽度圧痛。

【経過】食道症状はなかったが経過、症状よりGERDを疑いPPIと酸中和剤を投薬、生活指導を行った。2週間後にはのどの違和感はかなり改善し、動悸はほとんど消失。激しい勤務に就いても起こりにくくなった。夜勤をしても6週後には大きな状態の悪化は認めなかった。

【考案】1年以上の病態が劇的に改善しておりGERD治療が奏効したと考えた。発症が咳嗽、咽喉頭異常感とすすみ、その後自律神経失調症状にまで進展しており、咽喉頭異常感症は咳嗽症状を主訴とする患者に比べより複雑な病態を呈しているという我々の仮説を示唆する症例と考えられた。